

病に癒された父子の絆

板東洋三郎

胸に痛みを覚えて目が覚めた。明かりをつけて立ち上がった瞬間、意識を失った。救急車を呼ぶ妻の声が遠くで聞こえたが一瞬で消えた。

どのくらい時間が経っていたのだろうか。腰と背骨に例えようのない疲労感を覚えて目が覚めた。真夜中の集中治療室であった。心電図のアラームがなり続けていた。気がつくと、右の足首とひざがベッドに固定されていた。両手もベッドに縛られていた。それは右のそけいから挿入され、心臓に達するカテーテルを私が動かさないためであった。

この姿勢から来る苦しみに加えて、激しいうめきのあまり、口は極度に乾いていた。まさに絶望的であった。楽な姿勢を求めてわずかでも体をよじらすたびに、看護師は無言で矯正した。唇をぬらしてほしいと声にならない声で頼んだ。看護師が絞ったガーゼを唇に置いてくれた。それを力いっぱいかみ締めて得た一、二滴の水で、私は再び意識を失うように眠った。

その夜、夢を見た。私はめったに夢を見ない。まれに見たとしてもほとんど思い出すこともないのだが、この夢はいまでもはっきり思い出す。

その夢で私はひとり、車で急な尾根のような狭い上り坂を走っていた。横なぐりの雨と、谷から湧き上る黒雲で視界はゼロ。前進しても止まっても転落は避けられなかった。恐ろしさのあまり、アクセルを踏む私の足は震えが止まらなかった。そのとき、「パパイ」（お父さん）という聞きなれた声を聞いた。私は一瞬、声の方向を見たが誰も見えなかった。

しかし、それは、まぎれもなく息子の声だった。その瞬間に私は目を覚ました。胸にはいくつもの心電図のセンサー、鼻には酸素、尿道には管、そして両腕には八本の点滴がつながっていた。右脚と両手はベッドに縛られたままであった。診断の結果は急性心筋梗塞であり、そこは集中治療室であった。

午後になって妻が来た。私のことを知らされたブラジルに住む息子が、チケットが取れ次第来たいので、緊急にビザをもらうために、私の診断書を送ってほしいと連絡してきたと言った。それを聞いて私は感情を抑えることができなかった。息子のその一言は、私にとって大きな意味があったからである。

十数年前に帰国するまで、私は、三〇年ほど国外で生活していた。特にブラジルは長く二〇数年住んでいた。六〇年代の初期の学生運動に挫折した私は、大学を中退して単身ブラジルに移住した。三年ほどコーヒー園で日雇い労働者として働いたが、ふとしたことがきっかけで、現地の大学の神学部に入ることになった。卒業後に牧師として働き始め、日系二世の女性と結婚した。私たち夫婦には一男三女が授けられた。

十年ほど働いた後、神学をもっと学びたかった私は北米に行った。二年の課程が終わるころ、属していた教会から、ブラジル南部のパラナ州で、宣教の働きをしてほしいとの招聘を受けた。私たちは、帰国するまでの九年間をそこで過ごすことになった。一九八七年一二月のことだった。

新しい任地での働きは、実質ゼロからの出発であった。給与以外の、教会堂などの土地購入や建築のための資金は、すべて私の責任であった。宣教師はいわば元手なしの請負師である。契約期間となすべき働きが定められているのだから、私がそう考えたのも無理はなかった。そういう制限がモチベーションの一つであったし、私自身目標を定めて邁進するのが好きでもあった。

三年目に入ったころ、教会堂と学校をかねた建物の建築を始めた。もちろん十分な資金があったわけではない。しかし、できるところから始めるというのが私のやり方であった。建築が始まり、中学生であった息子も妹たちも学校が休みの日には、職人やボランティアの大人たちに混じり、すすんでレンガ運びや使い走りを手伝ってくれた。そんな中彼はアメリカで高校をしたいというので、私たちは事前に学校を見学し、同意した。卒業後、息子はカリフォルニア州のある医科大の予科に進学した。

そのころブラジルは、年間二五〇〇パーセントものインフレで、至る所で建築は中断されていた。さらに追い討ちをかけるように教会の世界本部は、世界中の宣教師を数年以内にそれぞれの本国に帰国させるという方針を打ち出した。私の場合それがいつになるのか、繰り返し本部に問い合わせても回答はなかった。いつ帰国命

令が出るかわからない状況で、なんとしても帰国前に建物を使えるようにしたいという私の強い思いは焦りに変わって行った。生活費はきりつめ、子供たちの学費も遅れ始めた。その分は、建材や職人の支払いなどに回されるようになっていた。

キャンパスでのアルバイトでは学生寮の食費を賄うことさえできなかった。それでも息子は仕送りの請求はしてこなかった。親の私を信頼していたに違いなかった。さすがに、それ以上知らぬふりができなくなり電話したときは、すでに次の学期の登録期限は過ぎており、待っていた仕送りもないまま、息子は自分で退学の手続きをしたと言った。私は言葉を失った。取り返しのつかない失敗をしてしまった現実に愕然としたが、遅過ぎた。たとえ使命感からとはいえ、教会堂の建築の方を優先し、息子の信頼を完膚なきまでに打ち砕いてしまったのだった。何をいっても言い訳にしかない。私は、力なく謝るしかなかった。その言葉が終わるのを待つかのように、

「じゃあ、元気でね」

と言って彼は電話を切った。信頼の焼け跡に、どす黒い不信のわだかまりだけが残った。

あれから十数年。息子も自力で人生を切り開いていった。ブラジルに戻り、仕事も家庭も一見順調であった二年前、息子の家族に二番目の子が生まれた。女児であったが、腸閉塞で生まれた。医師はダウン症を疑い検査をした。陽性であった。生後わずか五日目で、全身麻酔から目を覚ます保証さえない、七時間に及ぶ手術であったが、幸い一命は取り留めることができた。さらに半年後大きな手術を受けた。この間葛藤も悩みもあったにちがいない。

しかし、いまでは、この子のおかげで思いやりのある家族になっていると息子夫婦は言う。

「子どもたちのおかげで、僕も少しは成長できたかな」とその頃のメールで書いてきていた。

アマゾン川の河口の街から、三八時間かけて息子が到着したのは、私が退院した翌々日の、雪がちらつく寒い二月初めの夜であった。